日本篆刻家協会会報

第19号　平成29年10月1日発行
発行：日本篆刻家協会
563-0032 池田市石橋2-2-10-203
TEL 072-760-3852 FAX072-760-3853
E-mail : info@n-tenkoku.jp
http://www.n-tenkoku.jp

特別展観・幹部役員コーナー

第三十三回 日本篆刻展開催

日本篆刻家協会主催「第三十三回日本篆刻展」が平成二十九年七月十二日（水）から七月十七日（月・祝）までの六日間にわたって開催された。耐震工事のため昨年は兵庫県立美術館に会場を移したが、工事完成後リニューアルされた兵庫県立美術館王子分館 原田の森ギャラリーに戻っての開催となった。特に本館一階は壁紙や照明器具が全て新しくなり、明るい会場で凛然とした見応えある展示となった。

リニューアルされた兵庫県立美術館王子分館 原田の森ギャラリー外観

リニューアルされた本館1階展示室

第三十三回展は、公募作品五六点（昨年比九点増）、会員作品一九二点（同三二点減）、委員作品一七五点（同六点減）、常任委員作品一七四点（同二七点減）、役員作品二一〇点（同二点増）の合計八〇七点（同五四点減）が展示された。近年出品数の減少が目立っており、今年度は六．三％の減少となった。

過去三年にわたって併設展として開催してきた『小中学生篆刻作品展』は、今年から高校生の部を加えた『学生展』として正式に発足させた。小学生二八三点、中学生八〇点、高校生四四点、合計四〇七点の出品があった。最優秀賞の岡本郁弥さん（高校生）の作品は大人顔負けのセンスで素晴らしい作品であった。

連続出品の小中学生も増え、古典に基づいた本格的な作品からイラストを用いた肖形印まで、楽しみながら篆刻に取り組んでいる様子が伺えた。

特別展観は『文房古玩―水滴・水盂をはじめとして―』と題して、会員所蔵の中国・韓国の水にまつわる文房具が数多く展示された。机上に置いて実用に供し、目を楽しませてくれる文玩品。小さいながら用美一体の世界は篆刻に通じる芸術性を有するもので、参観者の深い関心を得た。（黒田玉洲）

審査会

「第三十三回日本篆刻展」の審査会が五月二十一日、神戸市の兵庫県立美術館王子分館会議室で行われた。幹部役員を除き、全国から寄せられた評議員、参与、常任委員、委員、会員、公募の作品総数七三三点を対象に十八名の審査員が鑑別審査にあたった。今展より「高校の部」の増設に加え、参与に顧問賞が新設されるなど、新企画を加えての審査となった。慎重かつ厳正な審査の結果、評議員から梅舒適賞三点、参与から顧問賞三点、常任委員から日本篆刻展大賞一点、同準大賞五点、同優秀賞二六点、委員から奨励賞四三点、会員から特選四二点、秀作六一点、公募から会員推薦賞五六点が選ばれた。尚、委員奨励賞から寄託賞二点、会員特選から寄託賞四点が選出された。

（松本雅至）

委員の作品を慎重に審査する審査員

高校生の作品を選別する理事長と常務理事

梅舒適賞を選考する常任顧問と正副理事長

●審査委員長
理事長　井谷五雲

●審査員
常任顧問　尾崎蒼石　山下方亭
顧　問　市川両僊
副理事長　喜多方邑　多田龍淵　中島春緑
平田蘭石　真鍋井蛙
代表理事　伊藤雅夫　黒田玉洲　酒居石荘
小朴圃　渡邉和琴
常務理事　伊佐治祥雲　梶田稲州　黄平齋
榊原晴夫

■梅舒適賞選考委員
常任顧問・理事長・副理事長　八名

■大賞選考委員（準大賞・優秀賞）
常任顧問・理事長・副理事長・代表理事　十三名

■日本篆刻家協会顧問賞
理事長・常任顧問・顧問　四名

■学生展選考委員
理事長・常務理事　五名

主な受賞者

◆梅舒適賞（評議員）
井後雅堂　板東香璋　本郷紫香

◆日本篆刻家協会顧問賞（参与）
大槻彦裔　小谷知洲　松田泰軒

◆日本篆刻展大賞（常任委員）
西岡青淡

◆日本篆刻展準大賞（常任委員）
石川無外　磯村育治　岡端如綸　尾原衣香
本江恵翠

◆日本篆刻展優秀賞（常任委員）
高杉桂華　水見積舟　三枝龍泉　中島敬次
安田佳舟　永野草翠　真田雅好　永井渓舟
森井昌雲　吉田尚　前口紅泉　和田美千代
道家薫染　長谷山墨石　山内昂波　吉原愛璃
北畑謙之　平中葭舟　三好和生　池谷玉樹
越野得月　戸出紅桃　山崎井泉　大我羊
大原　誠　花房浩佳

◇最優秀賞（学生展）
岡本郁弥

◇優秀賞（学生展）
川田彩乃　草地夏楠　高田恵里　田中柚衣
谷澤さくら　塚本彩日　濱崎恵理　福本あみ
山田向日葵　吉田百花

授賞式

七月十五日午後、ＡＮＡクラウンプラザホテル神戸で授賞式が開催され、全国から一九七名が参加した。第三十三回展の概要報告および本年度審査員の紹介の後、賞状賞品授与に移った。まず、今展より併催となった高校の部より、最優秀賞および優秀賞の受賞者が紹介され、多田龍淵副理事長から賞状が授与された。次に公募・会員の部では、会員推薦賞、秀作賞、特選の受賞者が紹介され、同副理事長から代表者に賞状が授与された。委員の部では、日本篆刻展奨励賞の受賞者が紹介

晴れの舞台で理事長から準大賞を授与される受賞者

兵庫県 喜多和美副課長

神戸市 吉國雅博課長

兵庫県芸術文化協会 高橋淳部長

され、真鍋井蛙副理事長から代表者に賞状が授与された。また、今年度より新たに参与の部に顧問賞が新設され、山下方亭常任顧問から受賞者に賞状・副賞が手渡された。常任委員・評議員の部では、日本篆刻展優秀賞、同準大賞、同大賞、梅舒適賞の受賞者が紹介され、井谷五雲理事長から各人に賞状・副賞が手渡された。さらに寄託賞については、兵庫県知事賞・兵庫県教育委員会賞は兵庫県企画県民部芸術文化課の喜多和美副課長から、神戸市長賞・神戸市教育委員会賞は神戸市市民参画推進局文化交流課の吉國雅博課長から、兵庫県芸術文化協会賞は同協会の高橋淳総務部長から、神戸新聞社賞は同社地域活動局の井上隆次長からそれぞれ受賞者各人に贈られた。そして来賓紹介に続き、兵庫県喜多和美副課長の祝辞があり、受賞者を代表して大賞受賞の西岡青淡氏が謝辞を述べた。（松本雅至）

来賓を代表して祝辞を述べる喜多副課長

受賞者代表による謝辞

出品者懇親会

兵庫県立美術館 蓑豊館長

引き続き、同所で出品者懇親会が開催され、受賞者を祝福した。井谷五雲理事長挨拶、来賓紹介（別掲）の後、兵庫県立美術館蓑豊館長、神戸新聞社地域活動局井上隆次長から来賓祝辞があり、尾崎蒼石常任顧問の音頭で乾杯し、始められた。途中舞台では、小朴圃代表理事により上位入賞者の紹介とインタビューが行われ盛り上がった。和気あいあいの雰囲気の中全国からの参加者は歓談、交流を深めた。（渡辺和琴）

小代表理事からインタビューを受ける上位入賞者

神戸新聞社 井上隆次長

主な来賓

兵庫県企画県民部知事室芸術文化課 喜多和美副課長。神戸市市民参画推進局文化交流部吉國雅博担当課長。公益財団法人兵庫県芸術文化協会 高橋淳総務部長。兵庫県立美術館蓑豊館長。兵庫県立美術館王子分館原田の森ギャラリー 田中敬一館長。神戸新聞社地域活動局井上隆次長。NPO法人大阪府日中友好協会 大藪二朗副理事長。

他　計十六人

「第九回 日本篆刻家協会役員展」を古河市で開催

古河市教育委員会（篆刻美術館）と共催する「第九回日本篆刻家協会役員展」を四月二十九日から六月二十二日まで古河市篆刻美術館で開催した。

本年は、兵庫県立美術館王子分館（原田の森ギャラリー）耐震リニューアル工事のため日本篆刻展が七月開催となったことにより、例年どおりの本展の移動展が不可能となり、かたちを変えて実施することで開催にこぎつけた。今回は、本展とは別にいわゆる篆刻額サイズの作品を篆刻美術館に提供するかたちとなり、常任顧問から理事までの幹部役員と関東地区の参与・評議員九点を加えた計八十二点が展観された。

開会初日の午後、隣接の古河街角美術館二階で研修会が開催され、関東地方の会員をはじめ古河市民ら計五十人が参加した。協会が派遣した小朴圃代表理事は「明治から昭和の文化人の手紙」をテーマに所蔵品から持参した現物を展示・解説し、伊藤雅夫代表理事は「私の作品のつくり方」と題し初心者向けに篆刻作品制作の過程を話した。

広い会場いっぱいに展開された西泠印社創設四君子の書画篆刻作品

西泠四君子書画篆刻作品展

平成二十九年五月三日から七日まで兵庫県立美術館ギャラリー棟三階にて日中国交正常化四十五周年記念 西泠四君子 丁仁・王禔・葉銘・呉隠 書画篆刻作品展が開催された。これは日本篆刻家協会、西泠印社、丁鶴廬研究会が主催し、地元行政機関、美術・書道関係団体、中国大使館はじめ関係機関の後援のもと、国内篆刻関係団体の協力・協賛を得て開催したものである。

昨年秋に中国・杭州市の浙江美術館で開催された内容に加え、日本の収蔵家の四君子作品等を借用し展観に加え、新たに西泠印社所蔵の中国名家篆刻印扇、日本在住の日中西泠印社名誉社員等の作品も陳列されるなど、迫力と見応えのある展覧会となった。

前日に兵庫県知事を表敬訪問（於：兵庫県公館）左から
何平 西泠印社社務委員会副主任・丁如霞 丁鶴廬研究会会長・陳振濂 西泠印社副社長兼秘書長・井戸敏三 兵庫県知事・井谷五雲 日本篆刻家協会理事長・酒居石荘 日本篆刻家協会代表理事

○開幕式

三日、開幕式が十時から展覧会場で行われ、開会に先立ち井谷五雲理事長が挨拶された。この展覧会を開催するにあたり様々な苦労や問題があったことを聞き、この場に自分が立ち会えることの貴重さをあらためて感じた。続いて、西泠印社副社長兼秘書長・陳振濂先生が挨拶された。西泠印社の創設者である丁仁・王禔・葉銘・呉隠の四人はそれぞれに特長を有し、今回の展覧がそれを如実に物語っていること、そして今回特別に陳列した扇面作品〝古韵今聲〟は四君子の時代から三世代にわたって受け継がれてきた西泠印社の大きな財産と今をつなぐものであり、文化存続において大変意義のあるものだと話された。

開幕式で挨拶する井谷理事長

今年は日中関係において記念すべき年にあたる。この年にこのような展覧会を開催されたことの嬉しさ、芸を通じて精神を互いに高めんとする空気を会場全体から感じ取ることができた。四君子それぞれの作品が持つ鮮やかさ、訴求力に圧倒されながらも、負けないよう自分の力にしていこうという気持ちになった。（石留之然）

○座談会

開幕式の後、会場をＡＮＡクラウンプラザホテル神戸に移し、『西泠印社発展と中日文化交流』をテーマに、陳先生の司会進行のもと、西泠印社理事・社員・名誉理事・名誉社員の先生方を囲んで座談会が開かれた。陳先生と井谷理事長が三十年前に西泠印社で初めて顔を合わせた話題から和やかに始まり、先生方の西泠印社への思いが語られた。

西泠印社の歴代社長は篆刻の大衆化よりも精鋭化といった伝統を守ってきた。そのため技法に留まらず学術的な研究を進めてきたことが結果的に若い会員の増加に繋がっている。

日本では文革以後、先人の作品に直接触れて学ぶ機会が多くあり、西泠印社への強い憧れを持っていた。しかし近年は字典を頼りに作品を製作する傾向にある。本物に触れる機会を増やしたり、西泠印社出版の『西泠藝叢』を購読するなどして、西泠印社をより身

大勢の傍聴者の中での座談会（中央机に着席が西泠印社社員等）

机上に扇面作品「古韵今聲」、壁面には日本在住の西泠印社社員等の作品

近に感じて学べるようにしていきたい、といった内容であった。

日本と中国とでは篆刻に対する性質は異なるが、その違いを知った上で、さらなる交流を深めていきたいといった今後の西泠印社と当協会の関係について非常に建設的な話し合いがなされた。

（稲垣華扇）

○講演会

講演する陳副社長

座談会後、会場をホテル一〇階に移して陳先生が『印学史研究と篆刻芸術創新の関係』について講演された。創新とは新しい物を創り出すという意味であり、印学史とは一見無関係のように思われるが実際はとても深く関係し、密接に結びついているものであると話された。

具体的な例として西泠印社創立百周年以降、社員試験の中に古典に基づいた課題を入れるようになった。例えば漢印調、封泥調の印などである。当時、『私は浙派を基にしているので漢印の作風の印はつくれない』などという人が多く、この試験方法に反対する人も多くいたという。しかし、現在においてはこの挑戦は主流になりつつあり、今後、西泠印社がより精錬された団体として存在し、これを将来につなげていくためには印を刻す技術だけでなく、学術も必要であると述べられた。

熱心に聴講する大勢の参加者

日本においても同じように古典の香りのしないものに佳作はないといったことがよく聞かれる。やはり、よい作品を作るには、印の歴史についても学ばなければならず、さらにその伝統に自分の感じたものを掛け合わせ、新しいものを創っていくことが今の私たちに課せられた責務であると感じた。（井後雅堂）

○記念祝賀懇親会

祝賀懇親会は井谷理事長の挨拶から幕を開けた。四君子展の経緯とその苦労、そして各方面への協力に対して、あらためて感謝の言葉を述べられた。また我々は四君子の遺志を受け継ぐものとしてさらに篆刻芸術を盛んにし、書壇での篆刻の地位を高めたいと今後の指針を示された。

続いて西泠印社を代表して陳先生が祝辞を述べられ、今回のような大規模な交流には大きな意味があり、今回の交流を通じて日中双方の大きな活力を感じたと話された。また今後益々交流を盛んにし、篆刻が日中友好関係を左右するほどの発展を目指していきましょうと述べられた。

兵庫県書作家協会伊藤理事長の発声で乾杯

続いて中華人民共和国駐日本国大使館文化担当二等書記官・賀怡蘭先生、兵庫県知事・井戸敏三様（代理・兵庫県芸術文化課長・仲井敬司様）、西泠印社名誉理事・高木聖雨先生が祝辞を述べられた。その後、兵庫県書作家協会理事長・伊藤一翔先生のご発声で乾杯となった。会の途中では神戸新聞社地域事業本部長・面出輝幸様、全日本篆刻連盟理事長・和中簡堂先生、扶桑印社代表・遠藤彊先生にもお言葉を頂戴した。

日中西泠印社社員が壇上に一堂に会し、集合写真を撮る一幕もあり、終始和やかな雰囲気の祝宴は、本協会常任顧問の尾崎蒼石先生の閉会の辞で幕を閉じた。

（北田成磊）

日本在住の日中両国の西泠印社社員等が一堂に会する

第十回 中央研究会

平成二十九年八月五日（土）～七日（月）の三日間シーサイドホテル舞子ビラ神戸で開催され、全国から約一五〇名が参加。

スライド使っての文房古玩の講義

講師持参の白磁の文房具

第33回展特別展観を再現

一日目

正午より受付開始。午後一時三〇分、喜多芳邑の司会で開会。井谷五雲理事長挨拶、配付された分刻課題についての説明が引き続きなされた。今回の分刻については、五月に開催された西泠四君子展にちなんで竹、梅、蘭、菊の詩文を理事長に準備していただいた。

その後、七月の日本篆刻展の特別陳列を受け、酒居石荘代表理事に「文房古玩―水滴・水盂をはじめとして―」の講義をしていただいた。特に酒居先生所蔵の多くの白磁の文房具等を拝見できたことは、白磁文玩品に対する見識が深まり、整然と並んだ白磁の文房古玩は印象的であった。講義終了後、各自部屋に移動し、課題制作に取りかかった。夜は別室にて、企画委員会、印社代表者会議が開催された。

講義する酒居代表理事

分刻課題を解説する井谷理事長

印社代表者会議

二日目

九時より尾崎常任顧問、井谷理事長、真鍋副理事長、小代表理事による課題添削指導を行っていただいた。今回は二時間半という長時間にわたる指導をお願いした。懇切丁寧な指導がなされ、参加者にとっては学ぶべきところが多かったものと思われる。

添削指導する真鍋副理事長

添削指導する小代表理事

列をなして添削指導を受ける参加者

添削指導する井谷理事長

添削指導する尾崎常任顧問

熱心に聴講する参加者

午後二時半より、「―四君子展を振り返って―」と題し、黒田玉洲代表理事「西泠印社と四君子展について」、山下方亭常任顧問「西泠印社二〇周年記念金石書画集」の講義が行われた。研究部作成の資料集とプロジェクターにより西泠印社の細部にわたる話を黒田先生にはしていただき、山下先生には『西泠印社二〇周年記念金石書画集』を持参していただき、講義とともにじっくり鑑賞させていただいた。

夕食会は、松本雅至常務理事の司会で進められ、古溝幽畦常務理事からは各公募展成績発表があった。午後八時からは昨年同様、東尾高岳理事の司会でオークションが行われ、七〇点余りの出品があり、楽しい一時を過ごすことができた。

山下講師持参の参考品を熱心に鑑賞

講演する山下常任顧問

スライドを交え講演する黒田代表理事

三日目

チェックアウト後、舞子の間に集合し分刻課題を提出した。台風接近とのことで時間を切り上げ、多田龍淵副理事長にも簡潔な講評をいただき、早々に各自帰路についた。

（喜多芳邑）

提出された分刻課題を見る参加者

講評する多田副理事長

二月課題「從所好」

役員（真鍋井蛙選）

汀華　仁美　白水　桜洲　青露

常任委員（長谷川帰海選）

榮子　博石　我羊　謙之　秀鳳

委員（古溝幽畦選）

静二　不條　龍生　五岳　昌子

会員（松本雅至選）

悦治　勝山　精　輝雄　幽篁

一般（御手洗眉山選）

桃苑　晶石　鈴輪　俊彦　千春

【役員】田中九成　○岡上汀華　古野燕安　○片畑仁美　小谷知洲　○川崎白水　高野弘深　○谷桜洲　名倉克彦　○畑間青露　水野和香　松野碧泉　石亀明峯　千蔵天空　古瀬章石　計五三人

【常任委員】吉田尚　○中井榮子　鈴木恵草　○小澤博石　磯村育治　○大我羊　西野克衛　○北畑謙之　金井榴華　○津田秀鳳　花房浩佳　福谷華紅　堂守唯文　宮本瑞邦　梅田五月　計五六人

【委員】奥島極浦　○森静二　中本管城　○川端不條　平松清嗣　○吉岡龍生　中村紀久　○小松五岳　田原群蛙　○伊谷昌子　安保匠　馬場穆風　井上秋鹿　木谷劉石　松本矢岳　計四九人

【会員】松村信夫　○兼子悦治　西田のり昭　○大野勝山　水中澄山　○明石精　坂中泓　○向仲輝雄　高木啓志　○遠藤幽篁　浦田紫雯　井畑喜雨　岩崎玄到　大崎三嘉　上田玉雲　計五一人

【一般】吉田豊　○須田桃苑　尾畑翠庵　○誤晶石　矢場鷺雪　○牛島鈴輪　風間裕之　○小倉俊彦　辻合さゆり　○鈴木千春　國江碧翠　石田幹男　石場渓州　後藤英子　山田秀子　計二八人

三月課題「行己有恥」

役員（多田龍淵選）

章石　静雲　董圃　泰軒　青露

常任委員（南岳杲霊選）

戯石　尚　謙之　博石　臥牛

委員（池田泥異選）

紀久　管城　五岳　龍生

会員（伊佐治祥雲選）

喜雨　恵理子　玉雲　美舟　素風

一般（石原豊玉選）

鈴輪　千春　晶石　渓州　勝竹

【役員】宮越素翠　○古瀬章石　松野碧泉　○上田静雲　近藤胡蝶　○今村董圃　谷桜洲　○松田泰軒　古野燕安　○畑間青露　川崎白水　岡田桂舟　田中九成　岡上汀華　浅野道男　計五三人

【常任委員】花房浩佳　○岡崎戯石　高橋忠義　○吉田尚　萬谷碧凰　○北畑謙之　池谷宝樹　○小澤博石　堂守唯文　○加藤臥牛　三枝龍泉　長谷山墨石　田中紅珠　永野草翠　奥島艸丘　計五六人

【委員】益邑隆　○中村紀久　小林英昭　○中本管城　相楽黒主　○小松五岳　森口淡石　○井上秋鹿　木村行石　○高岡龍生　川端不條　白幡雪峰　安保匠　大塚秋露　奥島極浦　計五一人

【会員】高橋子路　○井畑喜雨　芦野幸宏　○袴田恵理子　明石精　○上田玉雲　山本智子　○栗永美舟　中本管玉　○鈴木素風　玉井妙子　相川良孝　奥野紅春　池田叡花　伊藤光崖　計五五人

【一般】山中徹人　○牛島鈴輪　石田幹男　○鈴木千春　楊八哥　○誤晶石　後藤英子　○石場渓州　小野倫熙　○広森勝竹　小林靖武　山崎恵子　大平正子　板屋玉芝　小倉俊彦　計二九人

四月課題「心手雙暢」

役員（中島春緑選）

碧泉

青露

常任委員（出田塘葭選）

謙之

平峰

委員（奥田晨生選）

不條

正人

容庸

敬次

一哉

董圃

克衛

萩露

博石

白水

会員（梶川久美子選）

智子

幽篁

黄瑞

管玉

浩二

一般（梶田稲州選）

鷺雪

碧翠

正子

勝竹

恵子

【役　員】　葭岡慶石
○松野碧泉　畠穆風
○畑間青露　岡上汀華
○木村容庸　片畑仁美
○今村董圃　丸山沙舟
○川崎白水　高野弘深
古野燕安　小谷知洲
上田静雲　田中九成
計四六人

【常任委員】　鈴木恵草
○北畑謙之　津田秀鳳
○松永平峰　中井榮子
○中島敬次　花房浩佳
○西野克衛　杉江周作
○小澤博石　田中紅珠
佐藤翠龍　岡崎戯石
高橋忠義　永井渓舟
計五七人

【委　員】　鈴木真壽男
○川端不條　武田黎秀
○青山正人　井上秋鹿
○小澤一哉　森静一
○大塚萩露　白幡雪峰
○濱谷春壽　前田舫厓
木谷劉石　木村行石
小松五岳　平松清嗣
計四九人

【会　員】　向仲輝雄
○山本智子　大崎三嘉
○遠藤幽篁　木田好昭
○堤黄瑞　森下正義
○中本管玉　橋本陽一
○岡本浩二　寺埜寿和子
袴田恵揮子　高木啓志
兼子悦治　山崎正彦
計五三人

【一　般】　小倉俊彦
○矢場鷺雪　吉田豊
○國江碧翠　山中徹人
○太平正子　楊八哥
○広森勝竹　誤晶石
○山崎恵子　鈴木千春
石場渓州　須田桃苑
辻さゆり　小野倫熙
計二八人

五月課題「得其楽」

役員（伊藤雅夫選）

静雲

章石

常任委員（草田翠苑選）

碧凰

平峰

正歩

悦子

明峯

照楓

克彦

戯石

委員（熊本夕生選）

群蛙

英昭

弘子

五岳

正人

会員（黄平齋選）

喜雨

悦治

黄瑞

幽篁

輝雄

一般（榊原晴夫選）

豊

倫熙

正江

徹人

洋子

【役　員】　土井青雅
○上田静雲　正和杏葉
○古瀬章石　川西卯水
○坂正歩　樋口桃園
○石亀明峯　増田紫治
○名倉克彦　服部九姚
浅野道男　田中九成
宮越素翠　倉野春雨
計五八人

【常任委員】　番定静山
○萬谷碧凰　上野鶴羽
○松永平峰　永野草翠
○黒田悦子　中島敬次
○杉原照楓　福谷華紅
○岡崎戯石　榊原有光
中井榮子　奥島艸丘
津田秀鳳　池谷宝樹
計五五人

【委　員】　内田哲舟
○田原群蛙　木村行石
○小林英昭　伊谷昌子
○北岡弘子　永田乾石
○小松五岳　井上秋鹿
○青山正人　中本管城
鈴木真壽男　森静一
中本崇　土屋功勝
計五三人

【会　員】　松村信夫
○井畑喜雨　森下正義
○兼子悦治　寺埜寿和子
○堤黄瑞　濱田良介
○遠藤幽篁　袴田恵理子
○向仲輝雄　田邊進
大野勝山　楊慧美
上田玉雲　大崎三嘉
計五四人

【一　般】　須田桃苑
○吉田豊　牛島鈴輪
○小野倫熙　小倉俊彦
○平子正江　広森勝竹
○山中徹人　浜戸三徳
○三宅洋子　板屋玉芝
石場渓州　石田幹石
楊八哥　久郷三雄
計三一人

六月課題「獨往」

役員（黒田玉洲選）

燕安

常任委員（田中修文選）

平峰

委員（堤白遊選）

昌子

会員（中村葉舟選）

叡花

一般（長谷川帰海選）

俊彦

仁美

秀鳳

弘子

妙子

鈴輪

碧泉

博石

秋鹿

登志美

鷺雪

明峯

喜久

極浦

渓月

正江

青露

華紅

博子

寿和子

玉芝

【役員】今村董圃　○古野燕安　正和杳葉　○片畑仁美　葭岡慶石　○松野碧泉　丸山沙舟　○石亀明峯　橋本碧峰　○畑間青露　山崎一雄　田中九成　水野和香　長谷川拓石　多田学友　計四三人

【常任委員】花房浩佳　○松永平峰　萬谷碧凰　○津田秀鳳　堂守唯文　○小澤博石　黒田悦子　○脇田喜久　鈴木恵草　○福谷華紅　長谷山墨石　永野草翠　高橋忠義　平中葭舟　岡崎戯石　計四六人

【委員】八木正明　○伊谷昌子　川端不條　○北岡弘子　白幡雪峰　○井上秋鹿　山下登雲　○奥島極浦　鈴木眞壽男　○山杉博子　境山正甫　田中滋　中本管城　大東尭夷　安保匠　計四三人

【会員】水中澄山　○池田叡花　岡田正雄　○玉井妙子　鈴木素風　○成瀬登志美　相川良孝　○三宅渓月　高木啓志　○寺地寿和子　上田玉雲　井畑喜雨　枝廣樹芳　栗永美舟　富士香墨　計四九人

【一般】石田幹石　○小倉俊彦　片岡和子　○牛島鈴輪　三宅洋子　○矢場鷺雪　大平正子　○平子正江　大喜多恵子　○板屋玉芝　三徳　鈴木千春　後藤英子　尾畑翠庵　須田浩次　計二八人

七月課題「消夏閑無事」

役員（酒居石荘選）

青露

常任委員（古溝幽畦選）

葭舟

委員（松本雅至選）

不條

会員（御手洗眉山選）

喜雨

一般（池田泥異選）

俊彦

見聲

翠龍

滋

管玉

恵子

容庸

容史子

五岳

浩二

八哥

尚石

我羊

秋鹿

黄瑞

翠庵

正歩

榮子

瑞碩

恵理子

勝竹

【役員】細川恵苑　○畑間青露　片畑仁美　○立石見聲　村田祥鳳　○木村容庸　川久保明　○渡邊尚石　青木雄山　○坂正歩　古瀬章石　古野燕安　川崎白水　安井芳泉　橋本碧峰　計五五人

【常任委員】吉崎雲堂　○平中葭舟　脇田喜久　○佐藤翠龍　松永平峰　○大城容史子　竹内霍山　○大我羊　河瀬魚仙　○中井榮子　吉田鏡水　川栄玉峰　金井榴華　番定静山　中島敬次　計五五人

【委員】安保匠　○川端不條　白幡雪峰　○田中滋　大塚萩露　○小松五岳　木谷劉石　○井上秋鹿　田原群蛙　○小嶋瑞碩　伊谷昌子　渋谷春壽　馬場穆風　奥島極浦　平松清嗣　計四九人

【会員】向仲輝雄　○井畑喜雨　大崎三嘉　○中本管玉　森清光　○岡本浩二　川崎禎水　○堤黄瑞　上田玉雲　○袴田恵子　山崎正彦　高木啓志　兼子悦治　遠藤幽篁　大野勝山　計五七人

【一般】川尻政夫　○小倉俊彦　小野倫熙　○山崎恵子　大平正子　○楊八哥　大喜多恵子　○尾畑翠庵　師資田絹江　○広森勝竹　誤晶石　御手洗義光　吉田豊　山中徹人　後藤登茂吉　計三〇人

展覧会成績

第七十一回日本書芸院展

史邑賞
出田塘葭

大　賞
岡上汀華　渋谷春好　西岡青淡　山本恵子

特別賞
北田成磊　嵯峨洛山　中川典子　花房浩佳
松田仰風　丸山沙舟　三好和生　山本龍石　吉原愛璃

第三十四回 読売書法展

読売新聞社賞
東尾高岳

読売奨励賞
中林千影　北田成磊

特　選
岸村爽風　山本寿法　畑間青露　嵯峨洛山

秀　逸
堂守唯文　松本弘碩　平田征男　仲森蓬園　坂正歩
丸山沙舟　武田黎秀　花房浩佳　村松瓊玉　北畑豊秀
青木雄山　石川無外　松本清苑　吉原愛璃　大原誠
下倉遥水

第六十三回 全関西美術展

日本書芸院大賞
出田塘葭

全関西美術展　第二席
妻鳥明子

全関西美術展　第三席
岡上汀華

全関西美術展　佳作
畑間青露

日本書芸院賞
寺田濤雲　松野碧泉　植田杏芽　岸村爽風　井本雅士
三好和生　松阪聖岳　武田黎秀　川口文子

第二回 陳介棋賞国際篆刻大展覧会

陳介棋賞
竹内立女

優秀賞
石亀明峯　川端不條　東尾高岳　出田塘葭　畑間青露

青鐙忘詠（十五）

小朴圃

「微意延年」

掲出の印「微意延年」、壬辰春仲に刻した。お気付きのように呉昌碩の「美意延年」の美を微としての模刻である。正確に言うと一字変えてあるので模刻とは言えぬが、他字はできるだけ原印に近づこうと苦心して刻したことを思い出す。原印は敢えて掲出しない。手許の資料によって比較されたい。

ところで美意延年とは、美しい心を持っていると長生きできるという意であるという。日本語での音通も可とし、この美字を微とすると、欲張らず少し控えめにして、ちょっとの気持が長生きさせる意とならんかと思いついての刻であった。但し、当然のことながら美と微は中国では音通とはならない。が、美を微とした面白さだけは伝わるか。

梅先生がご存命の頃、「篆美」の課題の語句のうち、一文字でもどこかの印譜にその文字があれば、それをそのまま使用して、他字をその文字に合わせるという手法で、作品を作ったことを思い起すが、この方法は、古印の味を吸収することと、他字の調子を合わすことで、自然と章法の勉強に繋がった。皆さんもぜひやってみられんことをお勧めする。

模刻は、篆刻の技術修得には外すことのできない、第一番の勉強法ではあるが、実際、根を詰めてやってみると、仲々に大変な作業の連続である。それをひと捻りしてこの手法で刻すと、意欲も大いに湧くというものだ。いや微意こそ肝心!?

大きく掲げられたプログラム

金石の都を象徴するモニュメント

広場での中学生の篆刻実習

〝第二回陳介祺奬〟萬印樓篆刻藝術節訪中団

去る九月一日、濰坊市で開催される〝第二回陳介祺奬〟萬印樓篆刻藝術節開幕式へ参加のため、日本篆刻家協会訪中団が派遣された。二日午前、開幕式に先立ち、〝宝鼎〟除幕式が行われた。目の前に巨大な毛公鼎のモニュメントが姿を現し、金石の都を象徴しているかのようだった。その後、屋外式典会場にて開幕式が華々しく行われ、日本篆刻家協会の団体賞受賞に引き続き、わが協会の竹内立女さんが陳介祺奬を壇上で受けた。開幕式が終わると、展覧会場へ移動し、中国、台湾、日本、韓国、シンガポール等よりの入賞入選作品を鑑賞した。さらに日本篆刻協会館では、わが協会の理事以上の先生方の軸作品、また別の会場では尾崎蒼石先生、井谷五雲先生の模刻作品が展示され、大変興味深いものであった。その後、日韓中の著名な先生方による討論会が夕方まで行われた。夕食はバイキング方式による宴会が行われ、各国の先生方が自由に談話されていたのが印象的だった。翌日、陳介祺故居を見学し、その横の大広場では、大勢の中学生が青空の下、篆刻実習をしていて、微笑ましい光景であった。四日は北京へ移動し瑠璃廠、潘家園で買い物を楽しみ、五日夕方帰国の途に着いた。

（畑間青露）

連載 名印解説 山田正平刻「善十郎」 真鍋井蛙

①

②

山田正平（一八九九～一九六二）は、篆刻家の木村竹香の次男として新潟市に生まれた。十六歳で上京し、山田寒山の娘婿となる。父と親交のあった会津八一の知遇を得、篆刻は山田寒山、河井荃廬、呉昌碩、徐星州等の影響をうけ、小川芋銭や中川一政と交流をもち、画も良くした。

篆刻は、前述の如く様々な人の影響をうけたが、字法・章法・刀法共に正平流を通し、ひとり超然としている。

ここにあげた「善十郎」がまさにそれにあたる。「善十郎」の印は私の知る限り、この二印だが①は『山田正平作品集』（二玄社）所蔵　②は小生友人の蔵で鶏血の美材に刻されている。款に「正平製辛卯一月」とあるから五十三歳の刻である。①がいつの刻かは不明だが石材のこともあってか少々雰囲気が異なる。ここに②の印面を拡大してみたが、刀の切れは他の追従を許さない。特に善字縦画をしっかり見ていただきたい。上部から入った刀は一気に下方に向かっている。また、善字上部の大きな欠けは、刀により故意に表現されたものであることが印面を見ればよくわかる。この大きな欠けが無ければ、この印は少々一般的なものになったであろう。郎字の戯けた構え、善字言部の揺らぎ、この大きく欠いた縦画の大黒柱がみごとにマッチした名印である。

各印社活動トピックス

第三十二回 隨風會書法篆刻展

第三十二回展を四月二十五日から二十九日までの五日間、京都市美術館別館にて開催しました。今回の国際交流は中国西安の終南印社。最終日には三五名が訪日しました。前回に続き東京中央オークションとの併催は「文房四譜 名家文房コレクション展 雙石艸堂 呉昌碩 斉白石書畫展」でした。

ビックな田黄の印材、硯、犀角等々陳列品の総額は二十億円であったという。

会員は 篆書と篆刻を一体化した全紙、半切軸作品を発表。これらの作品は振り分けて六月には韓国水原市で開催の日中韓国際書道交流特別展に。九月には西安で終南印社との交流展に出品します。ワンコイン採拓、並びに刻印の売上金を震災義援として届けました。（中村葉舟）

香港で 知遠室蔵書畫文物展

五月二十七日から三十日まで香港会議展センター・ホールで東京中央オークション主催、在香港日本国総領事館後援「昌碩墨妙・一亭墨戯」―知遠室蔵呉昌碩 王一亭書畫文物展―が盛大に開催され、連日香港、中國、台湾の愛好者で賑わった。

前日の二十六日十八時三十分より開幕式が挙行され、中島春緑先生ご夫妻、緑甫先生が出席されました。大勢の特別招待者の前で、中島春緑先生のご挨拶のあと、来賓の在香港日本国領事館杉田雅彦廣報文化部長、童衍方西泠印社副社長、呉越（呉昌碩曽孫）先生、廖湘桂東京オー

クション社長の順で祝辞があり、会場に入り作品を鑑賞した。出陳作は呉昌碩、王一亭の書畫、刻印、硯等合わせて八十点で製作年代順に展示され、大好評を博した。同時に知遠室蔵書畫文物叢書①「一亭墨戯」②「昌碩墨妙」のB四判豪華図録（三圭社刊）が二冊出版された。

中島先生は、若い頃より書法篆刻を学ぶにおいて、本物を身近で見て、肌で触れ、美的感覚を養い、心豊かにしての創作活動を目標としてこられました。つまり「實事求是」が先生の学書の方針でございます。

王一亭、呉昌碩の集大成といえる今回の展覧会が、大盛況に終わりました事を報告致します。（草田翠苑）

第十五回 平田蘭石～七人展 関中印社選抜書作展

新緑が鮮やかなこの時季、関中印社主宰平田蘭石先生と、その門下生幹部六名を含めた選抜書作展を五月三十日（火）から六月四日（日）までの六日間、関市本町、せき・まちかど工房ギャラリーで開催いたしました。

このギャラリーは、せき・まちかど工房を支援する会で維持、管理をしていて、この会の副会長に平田蘭石先生、理事兼事務局長に私こと武井岳峰が勤めている。週替わりの展覧会が開かれ平成二十八年度は、年間約一万人の来場者があり存在は市民に定着している。また、支援する会の会員相互の連携を図ることから、これまで毎年選抜展を開催してきました。

今回は、篆刻・篆書作品二十二点、遊印三十点を展示、会場には中国最古の甲骨文字、西周鐘鼎文字等の作品のほか、平田蘭石先生所有、周十鐘拓の軸を展示、鐘は中国の周代のものとあって特に関心を持たれ、来場者皆様の輪が広がり大変好評でした。

会期中、ご多忙の中、関市長、岐阜県議会議員、市議会議員を始め多くの方々にご高覧を賜り心よりお礼申し上げます。また、この選抜展を通じ地域文化向上に少しでも貢献できればと願っています。

今後は、隔年の開催となりますが、一層のご指導を賜りますようお願い申し上げます。（武井岳峰）

月例作品募集（2018年）

	課　題	出　典	意　味
1月	**無求**	論語	求めないこと
2月	**忘筌蹄**	荘子	目的を遂げたら利用した道具を忘れること
3月	**陶然自楽**	陶淵明	愉快な気持ちになり快く楽しむこと
4月	**如意**	漢書	自分の思うままになること
5月	**可久長**	荘子	変わりなくいつまでも続くことができる
6月	**心無累**	王安石	心にわずらわしいことがない
7月	**物新人舊**	陶淵明	物事は新しいが人は古い
8月	**神情朗達**	晋書	賢明で物事をよく知っていること
9月	**游神**	楚辞	心を遊ばせること
10月	**徳不孤**	論語	徳のある人は孤立することがない
11月	**墨戯**	宣和画譜	思うがままに書画を書くこと
12月	**爲而不恃**	老子	功績があってもそれを誇らないこと

応募要項

① **一般は一般を、一般以外は会員CDを必ずご記入ください。未記入の場合は審査対象外となります。**

② 印の大きさは一寸以内、用紙は協会指定印箋（篆社印箋も可）

③ 応募は各月1人1点、締め切りは各月末日（消印有効）

送　付　先 〒563-0032 大阪府池田市石橋2丁目2-10 牧野ビル203

日本篆刻家協会「○月課題」係

お問い合わせ（協会事務所）**TEL072-760-3852**

展覧会案内

▼不華篆会（酒居石荘）
デザインとして見る篆刻の展開
不華篆会習作展ＸＸＶ
―「風」字をデザインして生活の中に書・篆刻―
会期　一一月三日～五日
会場　伊丹市立工芸センター
一一月二八日～一二月七日に兵庫県立丹波の森公苑で巡回展

▼遠邇篆会（伊藤雅夫）
第二六回 **遠邇篆会展**
会期　一一月二一日～二六日
会場　磐田市立中央図書館

▼娯憚文会（井谷五雲）
第一二回娯憚文会書法篆刻展
会期 一二月一五日～一七日
会場 兵庫県民会館 県民アートギャラリー

▼井後雅堂・石留之然・稲垣華扇・北田成磊・東尾高岳
第四回 **伍葉展**
会期　二〇一八年一月二六日～二八日
会場　神戸元町　みなせ画廊

報告

▼稲香印社（梶田稲州）
第七回 **稲香印社展**
会期　七月二五日～三〇日
会場　名古屋市民ギャラリー栄

▼井谷五雲・小朴圃・真鍋井蛙
第三六回 **六轡会書画篆刻作品展**
会期　八月二三日～二七日
会場　京都文化博物館

▼畦石舎（小朴圃）
篆刻・書・画　第三二回 **畦石舎作品展**
会期　九月二日～三日
会場　日図デザイン博物館

▼篆靄社（古溝幽畦）
第一〇回 **篆靄社游藝展**
会期　九月一五日～一八日
会場　兵庫県立美術館王子分館 原田の森ギャラリー

▼齊平篆会（真鍋井蛙）
第二〇回 **齊平展**　テーマ展示「寿」字印
会期　九月二九日～一〇月一日
会場　大阪産業創造館
併催：会員蔵 日本印人作品（江戸期）

▼池田泥異・喜多芳邑・黒田玉洲・古溝幽畦
第二四回 **一隅会展**
会期　九月二九日～一〇月一日
会場　大阪市立住まいのミュージアム

協会行事

第九回 日本篆刻家協会役員展
四月一九日(土・祝)～六月二二日(木)
古河市立篆刻美術館

西泠印社四君子展
五月三日(水)～七日(日)
兵庫県立美術館 ギャラリー棟

第三三回 日本篆刻展　審査会
五月二〇日(土)～二一日(日)
兵庫県立美術館 王子分館(原田の森ギャラリー)

第三三回 日本篆刻展
七月二二日(水)～二七日(月・祝)
兵庫県立美術館 王子分館(原田の森ギャラリー)

授賞式
七月二五日(土)
ＡＮＡクラウンプラザホテル神戸

第一〇回 中央研究会
八月五日(土)～七日(月)
シーサイドホテル舞子ビラ

第二回 陳介祺奬 萬印楼篆刻藝術節
参加訪中
九月一日(金)～五日(火)　山東省・北京
一九人訪中

予定

常務理事会
一月一八日(土)
錦城閣

理事会・総会・新年会
二〇一八年一月七日(日)
シェラトン都ホテル大阪

第三四回 日本篆刻展　審査会
二月二四日(日)～二五日(日)
兵庫県立美術館 王子分館(原田の森ギャラリー)

第三四回 日本篆刻展
四月一八日(水)～二二日(日)
兵庫県立美術館 王子分館(原田の森ギャラリー)

授賞式
四月二二日(土)
ＡＮＡクラウンプラザホテル神戸

第一〇回 日本篆刻家協会役員展
四月二八日(土)～六月二日(木)
古河市篆刻美術館

第一一回 中央研究会
八月四日(土)～六日(月)
シーサイドホテル舞子ビラ

お気づきのこと、ご意見など
事務所までお寄せください。
MAIL FAX 072-760-3853
info@n-tenkoku.jp

編集後記

☆―うつせみの殻にやどりし夢あわれ―
石牟礼道子句　例年なら煩わしい程の蝉時雨であるが今年は全く気にならなかった。庭で見る空蝉も少なかったように思われる。関東は雨続き、西日本はいつも以上の蒸し暑さ、気候の変化だろうか、はたまた北朝鮮の弾道ミサイルの発射、水爆実験を感じてか　―テレビコマーシャルでの危険を察知！―　もう一年地下シェルターに身を潜めたか。

☆植物は六週間もの気温の変化を記憶して開花時期を制御しているという。そうして毎年季節の花を咲かす。
たまには狂い咲きもあるが、自然界の営み、見習いたい限りである。

☆本年度中央研究会での講義「文房古玩―水滴・水盂をはじめとして―」（酒居石荘先生）で、文房諸具の中、一番身近な物の一つである水差し。外出先では代用品としてプラスチック製のスポイドのようなものをよく使っておられるようだが、この機に自宅では、水滴・水盂に変えて、文人の一歩を踏み出してみては如何でしょう。（容庸）

編集：会報部
酒居石荘　木村容庸
戸出九廬　畑間青露